
宇宙人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙人

【Nコード】

N2822G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

野球選手としての能力は高いのにどうにもこうにも変てこいうかい加減というかそんな新庄。そんな彼に野村監督とファンは呆れながらも温かい目を向けていて。新庄選手を書いてみました。野村監督も大活躍です。

第一章

宇宙人

「小学生からやり直さんかい」

「ドラえもんの机がいいですね」

監督に怒られてこう返す男がいた。この監督の名前を野村克也といい男の名を新庄剛志という。彼等はこの時阪神タイガースにいた。「ホンマにあいつはなあ」

「監督って凄くいい人なんですよ」

野村が言えば新庄はすぐにこう言った。とにかく奇妙な二人だった。

だがその野村も何だかんだと言って新庄に対しては。意外と評価していた。

「確かに守備も肩も足も凄い」

新庄のセンターとしての能力は高く評価していた。

「長打力もあるし勝負強い。それは認める」

「いやあ、僕は記憶に残る男ですから」

「しかしのう」

ここで野村はいつも言うのだった。

「怪我にも強いのに。あいつはのう」

「あいつは？」

「どうしたんですか監督」

マスコミの記者達はここぞとばかりに野村に対して問う。野村が次にどういった言葉を出すのか注目しているのだ。そしてこうした時に必ず答えるのが野村という男である。実はかなりサービス精神も豊富なのだ。

「頭がないんや」

「頭がですか」

「考える力がない」

はつきり馬鹿と言っているのだ。

「物事をなあ。考えることができるのや」

「考えることができますか」

「ついでに言えばムラツ気の塊や」

新庄の安定感のなさはあまりにも有名だった。だか打率がどうしても悪かった。

「それが困ったもんや」

「そうなんですか」

「まあ新庄選手ですしね」

記者達もこれで終わらせるのだった。だが当の新庄はというとそんなことを言われても全く平気であった。相変わらず能天気なままで野球を楽しんでいた。

「明日も勝ちますよ!」

「アホ! そんなん言うなや!」

「負けるやろが!」

お立ち台で彼が明るくこう言うと言いつつファンがテレビの向こうから思わず叫んだ。そしてそれから阪神は何と十二連敗を記録したのである。

「何であいつが言うといつもこうなるんや?」

「絶対悪いとんで」

こう言う言葉が言われるのであった。

「ケンタッキーのおっさんか何かな」

「それかな、やっぱり」

勝手な推測だがこう言い合うのだった。とにかく新庄がお立ち台で何か言うと言いつつ阪神が負けるのだった。

こうした男だった。年収二千二百万の時には何と。

「おっ、新車やな」

「二千万したんだよ」

新しく買った車を同僚に自慢していた。

「いやあ、高いけれどさ。いい車だよ」

「そやけど御前年棒二千二百万やろ？」

「うん、そうだよ」

あっけらかんとしてチームメイトの言葉に答える。

「それがどうかしたの？」

「だからや。他どないすんねん」

「節約するけれど？」

当然車以外のことは全く考えていない。

「それがどうかしたの？」

「税金どないすんねん」

チームメイトが言うのはこのことだった。

「税金。どないするんや？」

「あつ、そういえばそうか」

言われてやつと気付く新庄だった。

「そういえばそれがあつたんだ」

「あつたんやて御前」

「何考えてるねん」

呆れ果てた話だった。とにかく一事が万事こんな調子である。そして野村が監督になった時にこうしたことがクライマックスに達したのである。

「何であんなアホなんや」

野村は容赦なかった。

「野球は頭でするもんやぞ」

「僕だってそう思っていますよ」

新庄もこう返す。

「監督、やっぱり頭ですよね。野球は」

「じゃあ御前はいつも何しとるんや」

ジロリと新庄を見てから問う。

「言うてみい」

「考えてます、毎日」

明るい顔でこう答える。

「いつもどんな格好いいプレーするかお立ち台で何を言うか。ちゃんと考えてますよ」

「勝手にしとけ」

そしてそれを聞いてからこう返す野村である。おまえにそんな野村のところにあの長嶋一茂が来て親しげにインタビューをするのである。

「監督、どうですか調子は」

「何や、また御前か」

嫌そうな顔を作って一茂に答える。

「じゃあないのう。わしの顔見て飯が食えるんかい」

「ええ」

そして一茂も平気な顔で答えるのだった。

第二章

「それじゃあ今度どうです？ステーキでも」

「そやな。ティーボーンがええな」

「そうですか。じゃあまた今度」

「今度な」

噂では一茂を嫌い邪険にしていると言われていた野村だがまんざらではないといった様子だった。顔は一見して無然としているがはにかんでいるのがわかる。口も悪いが悪意のあるものではない。実は野村という男はこうした照れ屋なのである。一茂もそれを知っているのだ。

「とにかくや」

彼との話の後で新庄に顔を戻して話を再開する。

「御前にとつての頭を使うことはそれか」

「駄目ですか？」

「どうやら御前には言うてもあかんな」

突き放した言葉だった。

「勝手にせい」

「どうも」

そして新庄も平気な顔だ。

「何やったらピッチャーもやらしたるからな。肩は作っておくんやな」

「ああ、それは大丈夫ですよ」

これまた明るい返事だった。

「僕一球で肩できますから」

「そんな簡単に肩できるわけないやろが」

「大丈夫ですって」

やはりこんな調子だった。阪神は野村をもつてしても暗黒時代をひた走っていたがそんな中で新庄はまたとんでもない行動に出るの

だった。

「僕大リーガーになりますから」

「また言い出したよ」

「今度はこれか」

何処にこんな根拠があるのかわからない底抜けに明るいつもの笑顔でいきなり言い出したのである。皆またしてもという感じだった。

「引退するとか言って」

「今度はそれか」

呆れた顔で言う皆だった。マスコミだけではなかった。

「で、大リーガーか」

「本気かね」

「ニューヨークメッツに入りますよ」

おまけにこんなことまで宣言しだした。もうチームまでであった。

「ボビーと一緒に楽しく野球やりますから」

ボビーⅡバレンタインのことだ。既に日本でもロッテで監督をしたことがありその絶妙な采配が大人気となっていた。ボビーとはその彼の愛称である。

「そういうことで。アメリカの首都でね」

「ああ、新庄さん」

「それ違いますから」

皆新庄の今の言葉にはすぐに突っ込みを入れた。

「ニューヨークはアメリカの首都じゃないですよ」

「首都だった時期もありましたけれど」

「あれっ、そうだったんだ」

それを指摘されても特に恥ずかしがったりするところはなかった。

「首都じゃなかったんだ」

「そうですよ。アメリカの首都はワシントンですよ」

「ふうん、そうだったんだ」

「まあとにかくですね」

皆新庄のこうしたところはわかっていたからまずはそれは置いておいてそのうえでまた彼に対して話すのだった。彼等も手馴れたものであった。

「本当に大リーガーになるんですか」

「うん、ニューヨーカーになりますから」

やはり無意味なまでに明るい。

「期待しておいて下さい」

「大丈夫かな」

「駄目じゃないのか？」

皆顔を見合わせて言い合う。

「これだけ安定感がないとな」

「けれど能力自体はあるからなあ」

「どうなんだろ」

「駄目に決まってるやろ」

それぞれ口々に言うが大方は駄目だろうと見ていた。野村もフロントも高給を出して引き止めたが新庄は金にはこだわらない男であった。

「そういうの関係ないですから」

「関係ないんかい」

「ええ。僕は夢を追う人間ですから」

野村に対しても言うのだった。

「じゃあそういうことで」

「全く。御前っちゅう奴は」

野村は新庄の説得を諦めると今度は溜息をつくのだった。

「わからんのう。金にもこだわらんし」

「ファッションにはこだわりますよ」

「そんなもんはどうでもええ」

すぐに突っ込みを入れる。

「で、アルマーニ来て行くんかい」

「何なら監督も一緒にどうですか？」

アルマーニと聞いてまた言葉を返してきた。

「ベルサーチ来て。ほらあれ」

「ベルサーチかい」

野村の好きなスーツである。新庄は阪神に来た野村を見てまずベルサーチについて言った。こういうところもやはり新庄であった。

第三章

「あれか」

「あれ来て一緒に。イタリアで」

「悪いが御前一人で行け」

しかし野村はその誘いには乗らなかった。

「御前一人でな。夢を掴むんや」

「僕一人ですか」

「わしはここに残る」

阪神、そして日本に残るというのだった。

「ここで御前を見とくからな。頑張って来いや」

「ええ。じゃあまた」

「二度と返って来るなや」

最後には憎まれ口で返すのはいつものことだった。こうして野村は新庄を見送り新庄はやはりいつもの笑顔でアメリカに向かう。この時自分の父親にこう言われた。

「頑張れよ」

「わかってるよ」

最初は普通のやり取りだった。

「ナポレオンより有名になれよ」

「ナポレオン!？」

しかしここでいつもの新庄になるのだった。

「ナポレオンって誰!？」

「おい、まさかこいつ」

「知らんのちゃうか!？ナポレオン」

後ろで聞いていた皆はまた顔を見合わせて囁き合うのだった。

「ひょっとせんでも」

「そやろか」

「ルイⅡヴィトンより有名なの?」

そしてこう言う新庄であった。

「その人って」

「やっぱりこれかい」

「知らなかったんか」

皆の予想は見事当たったのであった。

「まあそうやろと思ったけれどな」

「ほんまにこいつは」

「まあそれはいいとしてさ」

自分で勝手に話を終わらせてしまう。

「アメリカでの僕の活躍期待しておいてね」

「ええ、それはまあ」

「期待していますんで」

「さあ、何しようかな」

もう早速アメリカで何をするかのことをイメージトレーニングしていた。野村に妄想と言われたそのトレーニングだ。やはり行っていたのだ。

「アメリカでステーキ食べて牛乳飲んで」

「それ日本でもあらへんか？」

「なあ」

皆今の言葉にもまた言う。

「普通にな」

「あるやろ」

「まあな。こいつはな」

「何をしてもおかしくないしな」

何だかんだ言って彼等も心情が好きだった。そうしてアメリカに行き大リーガーとなった新庄は初出場でいきなり騒ぎを起こしたのである。

何と二塁の代走でセンターフライでいきなりタッチアップだ。日本人はそれを見て唖然とした。

「またやりおったわ」

「変なことしよるわ」

「アホは死んでもなおらん」

その中で日本にいる野村は言った。

「ああいうことする奴や思うてた。予想通りや」

「予想通りですか」

「何がユニホームが格好ええや」

新庄がメッツに入って第一の言葉である。

「そういう問題やあらへんやろ」

「まあそうなんですけれどね」

「日本人やないって言うてましたし」

「少なくとも日本人やない」

何故かここでは新庄の言葉を肯定する野村であった。

「あれは宇宙人や」

「宇宙人なんですか」

「何を考えてるかわからん」

だからだというのだ。この容赦のなさはやはり野村である。

「背広に背広重ね着するしな」

「ああ、それもありましたね」

「あれにはびっくりしましたけれど」

「安心せい。もっとびっくりすることになるわ」

野村はまた皆に言う。

「あいつはな。天下無双のアホやからな」

こうは言っても笑顔の野村であった。

多くの者の予想に反して新庄は意外な活躍をした。そして彼は言うのだった。

「記録はイチロー君に任せて僕は記憶を狙います」

「確かに忘れられんわ」

「こんなアホは」

皆野村と同じ笑顔で言う。

「何処までやるんじゃこいつ」

「何考えてるねん」

こうは言っても見ているのである。彼等も殊勝と言えば殊勝だ。

「とにかくや。こいつ案外やるな」

「アメリカが会ってるんちゃうか？」

「やっぱり日本人やないんちゃうか」

こんな話にまでなった。

「外人になりたい言うてなあ」

「そやそや、それぞれ」

また一つ話が出て来た。

第四章

「髪の毛緑色やったもんな」

「外人はグリーンかい」

「そんなわけあるか」

流石にそれはなかった。だが新庄は違っていた。

「やっぱ宇宙人ちゃうか」

「神緑で外人やからな」

「なあ」

そしてこう言い合うのであった。

「訳のわからん奴や」

「ほんまやな」

そしてまた笑って彼を見るのだ。しかも彼は英語が喋れないのにこんなことまで言っていた。

「いや、感覚でわかるんですよ」

「感覚かい」

「マイアミをミアミと読む奴がかい」

英語に関してもこんな調子だった。

「不思議ですよ。僕英語わからないのに聞いていて話をしていらわかるんですから」

「御前が一番不思議じゃ」

「どういう現象じゃ」

皆また思わず突っ込みを入れた。

「伊達をいだてって読んだりな」

「日本語すら怪しいのに」

怪しいところではない。

「けれどメッツの皆には日本語覚えてもらってます」

「御前が英語覚えんかい」

「アメリカやろが」

また皆思わず突っ込みを入れた。

「そういうわけで頑張ってますんで。監督、そっちも頑張って下さいね」

「御前が頑張らんかい」

わざわざ言われた野村はまたしても悪態をつくのであった。

「ほんまにのう。あいつだけはわからんわ」

「けれどそのわりには監督」

「随分新庄については優しいんじゃないですか？」

「優しい？わしがか」

褒め言葉には悪態で返す、これが野村である。この時もそうだった。

「わしはあいつはなあ。見放しとるんや」

「そうなんですか？」

「言うても無駄や」

そのわりにはいつも言うのである。

「見ているだけや。そのアホぶりをや」

「そういうわけですか」

「まあ。あれや」

野村はまた言う。

「あのまま突き進むべきや、あいつは」

「そうなんですか」

「去勢なんかできる奴やあらへん」

何だかんだ言って認める言葉を言う。

「どうなるか。見せてもらうで」

「はあ。監督が言うんなら」

「それじゃあ」

こうして新庄は大リーガーとして有名になった。ところが三年目。また騒ぎを起こした。

「日本に戻ります」

「はい！？」

「また急に言うなこいつは」

「球団は日本ハムです」

しかもそのチームまで言う。言うまでもなく爆弾発言である。

「もうお話して決めましたから。フェラーリで北海道飛ばしますよ」

「って何時の間に決まったんや？」

「入団交渉とかまだの時期ちゃうんか？」

皆呆然としながらも何とか考えだした。

「今言うたらまずいんちゃうんか？」

「日本ハムのフロントもなあ」

当然日本ハム側も戸惑っていた。しかし新庄はそれでも爆弾発言を続けた。

「背番号は一ですから。格好いいですよね」

「また言うたわ、こいつ」

「だから言うたらあかんやろ」

だがそれでも新庄の入団は決まった。背番号は本当に一だった。注目度は巨人の監督に同時期に就任した堀内よりも遥かに上であった。

「えー、まあ青天の霹靂でありまして」

堀内だけが下品な笑みを浮かべてにやけているその記者会見は実に寒々としたものであった。この二年後堀内は無様な成績と采配の記憶を残し巨人を追い出されることになるのでその末路には相応しい就任記者会見であったと言えるべきであろうか。しかし新庄は違った。

「どうしてまた北海道に？」

「網走刑務所に行きたかったからです」

いつもの新庄節であった。

「だからちよつとフェラーリで行って来ます」

「札幌から網走までどれだけある思うとるんじゃあいつは」

野村はここでまた言った。

「北海道は広いんやぞ。日本に戻ってもアホは変わらん」

シダックスの赤いユニフォームに身を包んでの言葉であった。

「これからはパリーグですよ」

「ほう」

この言葉には顔を向ける野村であった。

「ええこと言うな」

「だから日本ハム行きますよ。期待しておいて下さい」

「期待はせんわ」

一応はこう言う野村だった。

「またアホなことするに決まってるやろからな」

こうは言っても新庄を見て笑みを浮かべている野村だった。そうしてペナントがはじまって暫くはその勝負強さと守備を見せるだけだった。ところがであった。

「オールスター、やりますから」

また新庄は言った。

「予告ホームランやりますよ」

「また言うたわ、こいつ」

「相変わらずやな」

それを聞いたファン達の言葉である。

「全く」

「今度はそれかい」

彼等の呆れたような言葉も変わらない。

「何をするんや」

「まあ見ておくかい」

そんなことを言っているうちにオールスターになった。そして新庄がその問題の打席に入る。打席に入るとまずは予告通りだった。

第五章

レフトスタンドをバットで指し示す。満面の笑顔で。

「ホンマにやるんかな」

「敬遠のボールでも始球式でも打つ男やからな」

ある意味新庄だからこそやれることではある。そして誰もそれで納得できるのもまた新庄だからであった。やはり新庄は新庄なのだ。つた。

「さて、バットに当たるんかいな」

「あかんのちゃうか？」

そしてこうも言われるのだった。

「三振多いからなあ、あいつ」

「ボール見とらんからな」

よくこう言われていた。三振が多いからである。

「まあそれでもな。見たるか」

「何しても驚かへんわ、こいつにはな」

こんな話をしつつ見守る。しかし彼等は大いに驚くことになった。
「なっ!？」

「それかい!」

何と予告ホームランをしながらしたのは。バントだった。

しかもそのバントは成功した。何と新庄は意外にもバントが得意だったの。

「ここでバントかい!」

「ホームラン打つんちゃうんかい!」

皆それを見て思わず突っ込みを入れた。

「ホンマにあいつは」

「明日も勝つ言うたら絶対に負けるしな」

「何でや」

満面の笑顔で一塁ベース上にいる新庄を見ての言葉だ。

「まあこれも新庄かいな」

「そやろな」

半分無理矢理納得しだしていた。

「これもこれでな」

「全く。わからん奴や」

しかもバントだけではなかった。何と今度はホームスチールだ。

そして今回も成功させた。お祭りの場がさらにお祭りになっていた。

「今度はこれか」

「やってくれるわ」

皆今度は唸るしかなかった。

「だからバントしたんやな」

「見事って言うべきやろな」

珍しく皆それを認めていた。

「これはな」

「確かに凄いわ」

「いやあ、ヘルメット取れて髪型が乱れないか不安でした」

しかし当の本人はこう言っていた。

「けれど大丈夫でしたね。よかったですよ」

「で、こいつはこれかい」

「やっぱり何も考えとらんのちゃうか？」

こう言い合うのであった。そして彼はまたやった。今度はベンチに戦隊ものがいたのである。

「あれは何や？」

皆またしてもそれを見て哑然として言うのだった。

「何か見慣れんもんがおるぞ」

「ここ、ベンチやな」

「ああ、そや」

「球場やぞ」

「そやな」

一応このことを確かめ合う一同であった。

「ここは間違いなくな」

「けれど何で戦隊がおるんや？」

「そういえばや」

ここで皆あることに気付いた。

「新庄やろ、あれ」

「むっ!？」

「確かにな」

「間違いないで」

ユニフォームの背番号を確かめる。見ればまさにその通りである。

「背番号一や」

「スコアボードにも名前があるな」

「ああ」

皆が漢字や片仮名であるのに彼だけがアルファベットだからすぐにわかる。そもそもこのネーミングも彼の案であるのだ。大リーグの影響らしい。

「じゃあ今度も」

「何考えてるんや？」

「けれどおもしろいな」

しかし誰かがここで言った。

「こういうのもな。プロ野球は何だかんだでショーやしな」

「ショーか」

「ああ。だからええやろ」

そしてこうも言うのだった。

第六章

「これはこれでな」

「それもそうか」

「それやったらや」

「ああ。乗るか」

そしてこういう考えに至った。

「ここはな。あいつに乗るで」

「楽しむっちゅうことかい」

「そういうこっちゃ。こうなったらとことんまで乗ったるで」

皆もう乗り気になっていた。何時しか新庄のペースに進んで乗っていた。

今戦隊のメンバーがグラウンドに散る。皆拍手と歓声で彼等を迎える。この時東京ドームでは堀内が陰気な顔で負け試合の采配を延々と執り続けていた。札幌には太陽があり東京には暗黒があった。これだけのはっきりとした差が出てしまっていたのであった。

新庄はそれから仕掛けていた。今度はダースベイダーになった。当然その中身は新庄であり相変わらずの笑顔でマスクから顔を出していた。

「許可は取っていますよ」

「そんな問題やあらへんやろが」

野村はジョージ・ルーカスから許可を得ているという新庄の言葉を聞いて言った。

「全く。前は自分の顔の面被ったりな。何でもありやな」

「こいつ、何処までやるんや？」

「もうわからんようになってきたな」

皆新庄が次に何をするのか全く読めなかった。だがそれもまた楽しくなってきたのだった。

それから戦隊になりダースベイダーになり自分自身になった。

これが永遠に続くかと思われた。ところがであった。それは突如として終わることになった。

「引退します」

「何っ!？」

「何やとっ!？」

皆今度もまた驚いた。今度はこれまで以上だった。

「引退!？嘘やろ」

「早過ぎるで」

「もう充分やりたいことやったんで
そしてまた明るい顔で笑っていた。

「これからはデザイナーやります」

「デザイナー!？そういえばあいつ」

「前そんな言うてたな」

皆ふとこのことを思い出したのだった。

「あの時はまた変なこと言うてると思うてたけれどな」

「どうなんやろ」

「まあとにかくや」

しかしそれでも話は決まっていた。新庄は引退すると言っているのである。このことだけは紛れもない事実であり否定できないものがあつた。

「あいつが引退するんやな」

「そやな」

話はここに移っていた。

「あいつがなあ」

「はよ辞めてまえて思ったこともあつたけれどな
あまりにも三振が多かったからである。

「それでも。引退するってなったら」

「ホンマかいな」

首を傾げての言葉だった。

「あいつが。嘘ちゃうかな」

「あいつは嘘は言わへんぞ」

皆これはわかっていた。新庄はそんな男ではないということは。

「それはないからな」

「じゃあホンマかいな」

「ホンマに引退するんやな」

「寂しいな、何か」

今度はこう言うのだった。

「せめてなあ。あともうちよっと」

「おるんやと思うたしな」

「成績は相変わらずやからな」

これもまた事実だった。彼の成績は今までと殆ど変わっていないかったのだ。

第七章

「それで引退なんてなあ」

「けれど自分しかわからんこともあるやろ」

「そやな」

「こうも思う一同だった。」

「あいつにしかかな」

「わからんやろ」

「じゃあ。ここはどないする？」

「どないするって」

「一つしかないやろ」

「また言い合うのであった。」

「あいつを見送ったるか」

「そやな」

「こういうことだった。」

「それはな。それやったらな」

「そうするか」

「そう言い合って納得するしかなかった。」

「最後の最後までな」

「見たるか」

「全く。何を言うかと思えばや」

「野村がここでもまた言うのであった。」

「またいきなり変なこと言うわ」

「けれど監督」

「新庄選手は本気みたいですよ」

彼はこの時シダックスから楽天の監督になっていた。その彼に対してマスコミの者達が集まり彼の話を聞こうとしていたのである。

「どうやら」

「今シーズン限りで」

「まああれやな」

野村は彼等に応える形で言ってきた。

「今までようやった」

「そうですね」

「確かにそれは」

「守備はよかった」

そして野村は今度はこう言った。

「肩も強かったし足も速かった」

「あれっ、今日の野村さん」

「ちよっと違うな」

皆野村が話すのを見て不思議に思った。こうした時にこそ憎まれ口を言うのが野村だからである。このこともよく知っていたのである。

「何でまた」

「どういう気紛れかな」

「悪いものでも食べたのかな」

「勝負強かったしな。長打力もあったわ」

「やっぱりおかしい」

「こんなに褒めるなんて」

「しまもあの新庄を」

皆さらに不思議に思う。だがこれで終わらないのが野村である。だからこそこで彼は言うのだった。やはり野村は野村であった。

「ただ」

「ただ？」

「考える力がなかった」

最後にこう言うのであった。

「何も考えん。それがなあ」

「やっぱりそれですか」

「そうですね」

「そういうこっちゃ。まあそういうことやな」

これが話のオチだった。野村は新庄を認めながらも最後にはこう言うのだった。だがそれでも新庄を見続けていた。その新庄は最後のシーズンを楽しんでいた。

日本ハムは新庄の活躍だけでなく他の選手達の活躍もあり見事プレーオフも勝ち残った。そして日本シリーズ。新庄の陽気さは相変わらずだった。

「いよいよ最後ですね」

「そういえば新庄選手って」

「うん、そうなんですよ」

陽気に報道陣に応えていた。試合前の球場において。

「日本シリーズはじめてなんですよね」

「そうでしたよね」

「日本シリーズは」

「いや、幸せですよ」

そしてまた言うのだった。

「最後の最後でシリーズに出られるなんて」

「そうですね。本当に最後の最後で」

「シリーズなんて」

「日本一狙いますよ」

その陽気な声でまた語る。

「絶対にね。やりますよ」

「そうですね。それじゃあ」

「期待していますよ」

「記憶に残るようにします」

これはいつもの言葉だった。

「頑張って」

こうして彼の最後のシリーズとなった。シリーズは日本ハムはまず初戦を落としたがそれ以降は順調に勝利を重ねていった。そうして第五戦まで進んだ。日本ハムは既に三勝している。あと一勝で勝利という状況だった。

その中で新庄はバッテリーボックスに向かう。後ろからファンの声援がかかる。

「今までよくやったな！」

「面白かったぞ！」

暖かい声援だった。

「よかったな！」

「御前のことは忘れんからな！」

新庄は彼等を振り向かなかった。ただ背中にその言葉を受けるだけだった。そうしてバッテリーボックスに向かう。その彼を迎える中日ナインも温かい目だった。

第八章

「あいつは確かに天才だった」

中日の監督である落合も言うのだった。

「寂しいな。あいつがいなくなると」

「そうですね。本当に」

「ああ。これで見納めだな」

「そうですね。本当にね」

「いい奴だったよ」

語る落合の目も温かかった。こうして新庄はバッターボックスに入る。しかしあまりよくは見えていなかった。誰にも言わなかったが彼はこの時泣いていたのだ。

「おい新庄」

「はい？」

その彼に声をかけてきたのは谷繁元信だった。彼が阪神にいた頃から幾度となくバッターとキャッチャーとして対決してきた男だった。その彼が声をかけてきたのである。

「泣くな」

「泣きたくないんですけどね」

返事は苦笑いになっていた。

「それでも何か。どうしても」

「全部ストレートでいく」

「ストレートですか」

「だから最後まで御前らしく行け。いいな」

「……………有り難うございます」

最後に礼を述べた。そうして彼は最後の打席を終えた。三振だったが見事な空振りでの三振だった。ファン達もその彼を見て言うのだった。

「三振は三振やけれどな」

「ええ三振やな」

「そや。思いきり振っとる」

いつもの新庄の三振だったのだ。

「見ていて気持ちのええ三振やな」

「そやな。けれどそれもこれで終わりやな」

「本当にな」

こう言い合い拍手でベンチに戻る彼を迎えた。そのまま試合は進み遂に九回裏になった。

試合は日本ハムリードのままだ。遂にツーアウトにまでなった。

そして遂に試合が終わる時が来た。レフとフライを森本稀哲が捕球する。喪芋とはボールを掴むとそのままセンターの新庄の方に向かって歩いていく。そのまま二人で抱き合った。

「これで終わりなんですよね」

「うん、もうね」

新庄は今も泣いていた。喜びに沸く日本ハムナインはマウンドに雪崩れ込む。しかし新庄はそこまで辿り着くことができない。涙でそこまで歩くこともできなかったのだ。

「皆、行こう」

「はい」

「そうですね」

ここで監督であるヒルマンがナインに声をかけた。皆彼の言葉に従いそのままセンターの方に歩いていく。新庄はその彼等と一人一人抱き合っていく。ファン達の中にもその彼を見て泣く者すらいた。そして今ヒルマンが彼等に声をかける。

「皆、胴上げだ」

「はい」

「僕のことはいいい」

まず自分のことは置いておけというのだ。監督である自分を。

「新庄だ。新庄を胴上げするんだ」

「いいんですか？」

「監督は」

「後でいいんだ」

あくまでこう言うのだった。

「僕は後で」

「わかりました。それじゃあ」

「新庄さん」

「……僕が」

「ええ。僕達も」

「是非。やらせて下さい」

新庄に対しての言葉だった。そして今新庄を囲んで彼を高々と胴上げた。これが彼の最後の晴れ舞台だった。

「よおやった」

それを見ていた野村の言葉だ。

「今まで野球の為にな。よおやったわ」

「そうですね、本当に」

「新庄選手は今まで本当に」

「これも野球選手や」

野村はまた言った。

「最後の最後までな。新庄は新庄やったわ」

「はい……」

見れば野村の目も暖かかった。その暖かい目こそが彼の新庄への言葉だった。何もかもが終わった。彼は最高の花道を飾ったのだ。た。

ところが。彼はまたやったのだった。

「何や、あれは」

「ええと、あれは」

「何なんでしょうね」

「あれでヨン様のつもりなんか」

日本ハムの優勝パレードのことだった。何故かそこに韓流スターがそこにいたのだ。

「一発でわかったぞ」

「何なんでしょうね」

「まああの人ですからね」

「引退してもアホはなおらんな」

野村はその彼を見てこう言った。

「つける薬があらへんわ」

「はあ」

「そうかも知れませんね」

「まあええわ」

しかしまた言うのだった。

「あいつはそれでな」

「最後まで新庄さんらしいからですか」

「御前と一緒や」

丁度いいタイミングで隣に来た一茂に対しても言う。

「アホはなおらんわ」

「馬鹿でもいいんですよ」

「わしはアホやと言うたんやがな」

「まあ大した違いはないじゃないですか」

そんなことにこだわる彼ではなかった。彼もまた新庄を見ている。

「そう思うんやったらええわ」

「とにかく。最後の最後まで新庄ですよね」

「それでええんや」

野村はそれを見て頷くのだった。彼はそのスターの格好で満面の笑顔でパレードに参加していた。新庄はあくまで新庄であった。

宇宙人 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2822g/>

宇宙人

2010年10月8日15時50分発行